三韓と倭の交流
海村の視点から

Interaction between the Three Han States and Wa:
From the Perspective of Settlements Based on Marine Resources

武末純一

TAKESUE Jun'ichi

はじめに
❶海村の設定
❷国の形成と海村
❸朝鮮半島南部の弥生人
❹楽浪土器と中国貨幣
❺冶鉄遺構と鉄素材，原料鉄
おわりに

［論文要旨］

弥生時代の農村は，海や山の生業が主体となる村を生み出す。この場合，海村・山村の目安になるのが石庖丁の量である。海村とした福岡県御床松原遺跡での石庖丁の量は通常の農村の1/5程度である。海上活動の比重が高かったとみられる対馬ではこれまで石庖丁は数点しかない。

前期末～中期前半の国形成期には，朝鮮半島から渡ってきた後期無文土器人系の集団が，拠点集落の周縁部に位置しながら故地との交流回路を維持して交易を主導し，港を整備し，青銅器生産技術を転移させて，国づくりにも関与したとみられ，いくつかの海村では海上交易活動が本格化する。

またこの時期には朝鮮半島南部にも弥生人の足跡が見られる。勒島遺跡の弥生系土器は中期前半が主体とされたが，近年では中期後半の土器も大量に出て，下限は弥生後期前半である。弥生中期前半以前を勒島Ⅰ期，中期後半以降を勒島Ⅱ期とすると，勒島Ⅱ期には勒島Ⅰ期よりも日本との交流の範囲は拡大する。ここには北部九州系の漁具（アワビおこし，結合式釣針）があり，北部九州の「倭の水人」の移住を示す。山陰地域にもそうした漁具があり，海民のつながりができていた。

中期後半以降（弥生後半期）の西日本と朝鮮南部の海村には楽浪土器や中国銭貨が目立つようになり，近畿から楽浪郡までの交易網に組み込まれたと見られる。とくに中国銭貨は，中国鏡とは対照的に，海村の日常生活域から多数出土するが，国の中心となる巨大農村やそこから展開した都市的集落ではほとんど出ない。これは朝鮮半島南部も同じで，勒島遺跡では日常生活域から5点出たが，拠点集落の日常生活域からは出ない。しかも倭と三韓の沿岸部では，ともに大量の中国銭貨が発見されている。したがって西日本と朝鮮半島南部の海村では農村とは別の世界をつくり，生業活動の主体である交易活動の場で中国銭貨を対価に用いたと見られる。交易の対象物はおそらく原料鉄や鉄素材であった。また，海村の南北市糴とは，南の物資を北に，北の物資を南に単に移動させるだけでなく，中間で加工して付加価値をさらに高めた可能性も出てきた。

【キーワード】日朝の海村，弥生時代後半期，原三国時代，渡来人集団，楽浪土器，中国銭貨

はじめに

『三国志』魏書東夷伝倭人条（魏志倭人伝）には，「王，使を遣して京都・帯方郡・諸韓国に詣り」とあり，壱岐・対馬に関する「南北市糴」の記述とあわせて，倭国にとって朝鮮半島との通交はきわめて重要であった。

弥生時代の日本列島には多くの農村が成立するとともに，漁撈や海上交易活動を主体とする海村[(1)]と，山での生業を主体とする山村も明確になる。そして弥生時代後半期（中期後半～後期）[(2)]の海村には，海上交易活動の比重が高い村もみられるようになる。本稿ではそうした弥生時代後半期の海村に特徴的にみられる中国銭貨や楽浪土器に照明をあてて，朝鮮半島との交流の実態に迫りたい。

❶……海村の設定

弥生時代に出現した農村は，縄文時代の一体化した海と山との中に割り込んで，海の生業や山の生業を主体とする村を生み出す。もちろん農村でも海や山の生業活動があるが，その比重は低い。農村が圧倒的に多い中で，すべての集落遺跡の中から海村・山村を抽出する目安になるのが，石庖丁の数量である。

筆者が弥生早期～中期初の山村と考える佐賀県唐津市押川（おしごう）遺跡は，唐津平野西側の上場台地でも西端付近の丘陵面上（標高114m）にある。ここでは竪穴住居8軒と貯蔵穴70基，小児甕棺7基が調査されたが，遺物は縄文時代以来の狩猟採集用具が圧倒的に多く，石庖丁は早期～前期前半の未成品がわずか1点出たにすぎない［佐賀県教育委員会 1981］。

海村の典型例には，福岡県志摩町御床松原遺跡がある。ここは隣接する新町遺跡も含めて一つの村である［志摩町教育委員会 1983・1987・1988］。この村についてはすでに，「石錘がこの地域の遺跡としては異常に多く，鉄製の釣針やアワビおこしもあって，網漁の比重が高く，潜水漁法も行なわれていた」と述べて，海村とした［武末純一 1989］。さらに石庖丁についても，「石庖丁も一〇点ほど出ていて水田も行なっていたことがわかる」と述べたが［武末純一 1989］，農村での石庖丁の数量との対比を欠いたため，漁撈具の卓越だけで海村とするには，「農作業が一般的な農村のそれと同様な量であった」とする論の余地を残してしまった。御床松原遺跡の農作業の量が通常の農村のそれよりかなり小さかったことを証明するには，同様な規模の農村遺跡での石庖丁の数量を提示する必要がある。この場合，同時期で日常生活域の発掘面積がほぼ同じだというだけでは，遺構の疎密が影響するため，発掘面積のほかに，普遍的でしかも検出が容易な竪穴住居の数が同様な遺跡を選定しなければならない。こうした条件を満たす遺跡に佐賀県鳥栖市安永田遺跡がある［鳥栖市教育委員会 1985］。もちろん安永田遺跡は周知のように銅鐸や銅矛の鋳型が出た青銅器工房区を抱えているため，農作業のみに専念した純粋の農村ではないが，すでに明らかにしたように農作業は免除されていない［武末純一 1988］。したがってここと御床松原遺跡での石庖丁の出土数量にかなりの差があれば，純粋な農村との石庖丁の数量の差，さらには農作業との差はさらに大きくなるため，問題はないと考える。

御床松原遺跡は1982・83年の調査区で，弥生時代中期から後期が主体の竪穴住居33軒と古墳時代の竪穴住居68軒が発掘され，この時期の石庖丁は全部で12点である。いっぽう安永田遺跡の1980・81年調査区では，弥生時代中期後半から後期初頭が主体の竪穴住居37軒と古墳時代の竪穴住居12軒で63点である。つまり，この2遺跡での弥生時代竪穴住居1軒あたりの石庖丁の点数は，御床松原遺跡で0.36点，安永田遺跡1.70点となり，御床松原遺跡の石庖丁の量は安永田遺跡のおよそ1/5だから，農作業の比率もその程度であったとみられる。したがって，御床松原遺跡のように，周囲の遺跡よりも漁撈具の比率が高い沿岸部の集落は，海村の可能性が高いことになる。また，地理環境や魏志倭人伝の記述から海上活動の比率が高かったとみられる対馬でも，これまで石庖丁は数点しかなく，島全体が海村で占められたとみられる。

❷……国の形成と海村

北部九州では細形青銅武器の保有状況からみて弥生時代前期末以降に国が形成されはじめる。農村地域では福岡県吉武高木遺跡のように日常生活域の面積が10万㎡を超える国の拠点集落ができ，佐賀県吉野ヶ里町・神埼町吉野ヶ里遺跡では中期前半に20万㎡ほどを環溝が囲む。

こうした国の形成に，海村による対外交流が大きな役割を果したことは，漁撈具が卓越する長崎県壱岐市原の辻遺跡の様相からわかる。

原の辻遺跡では中期前半になると環溝が16万㎡の居住域を囲み，その中央には祭儀場ができる。そして環溝の西外側低地（八反地区）には大陸系の敷粗朶工法で船着場がつくられた［宮崎貴夫 2008］。この時期には側面に突起をもつ大型の鯨骨製アワビおこしも登場したとみられ[(3)]，八反地区から北側に隣接する不條地区にかけては前期後半から中期後半に無文土器や擬無文土器が集中する。朝鮮半島南部の後期無文土器人が継続的に渡来・集住して，故地との交流回路を維持しながら，船着場の築造さらには周縁部が中心部を制御する形で一支国の対外交流を主導し，国づくりに関わったのであろう。こうした無文土器人集団は，農村地域でも国の拠点集落の周縁に居住しており[(4)]，北部九州の大型成人甕棺墓地帯・細形青銅器副葬地帯をつき抜けた熊本市域にもみられるから，移動の自由をある程度もち，朝鮮半島の国々の意志も貫徹しながら，その地域での国づくりを補助・促進したとみられる。

❸……朝鮮半島南部の弥生人

弥生時代前期末以降には，朝鮮半島南部にも土器を中心に弥生系遺物[(5)]が出るようになり，なかには弥生人集団の居住を示す遺跡もある。戦前に出土した弥生系遺物には，慶尚南道金海市金海会峴里貝塚の前期末～中期初頭の大型成人甕棺3基がある［榧本杜人 1957］が，現在は行方不明で周囲の同時期の集落の様相もわからないため，ここではふれない。弥生人の居住が確実な遺跡には釜山市萊城遺跡［釜山直轄市立博物館 1990］と慶尚南道泗川市勒島遺跡［（財）慶南考古学研究所 2003，2006a～2006d］がある。

萊城遺跡の弥生系土器は弥生中期初頭～前半の搬入ないし忠実再現品で，発掘面積が狭いためか

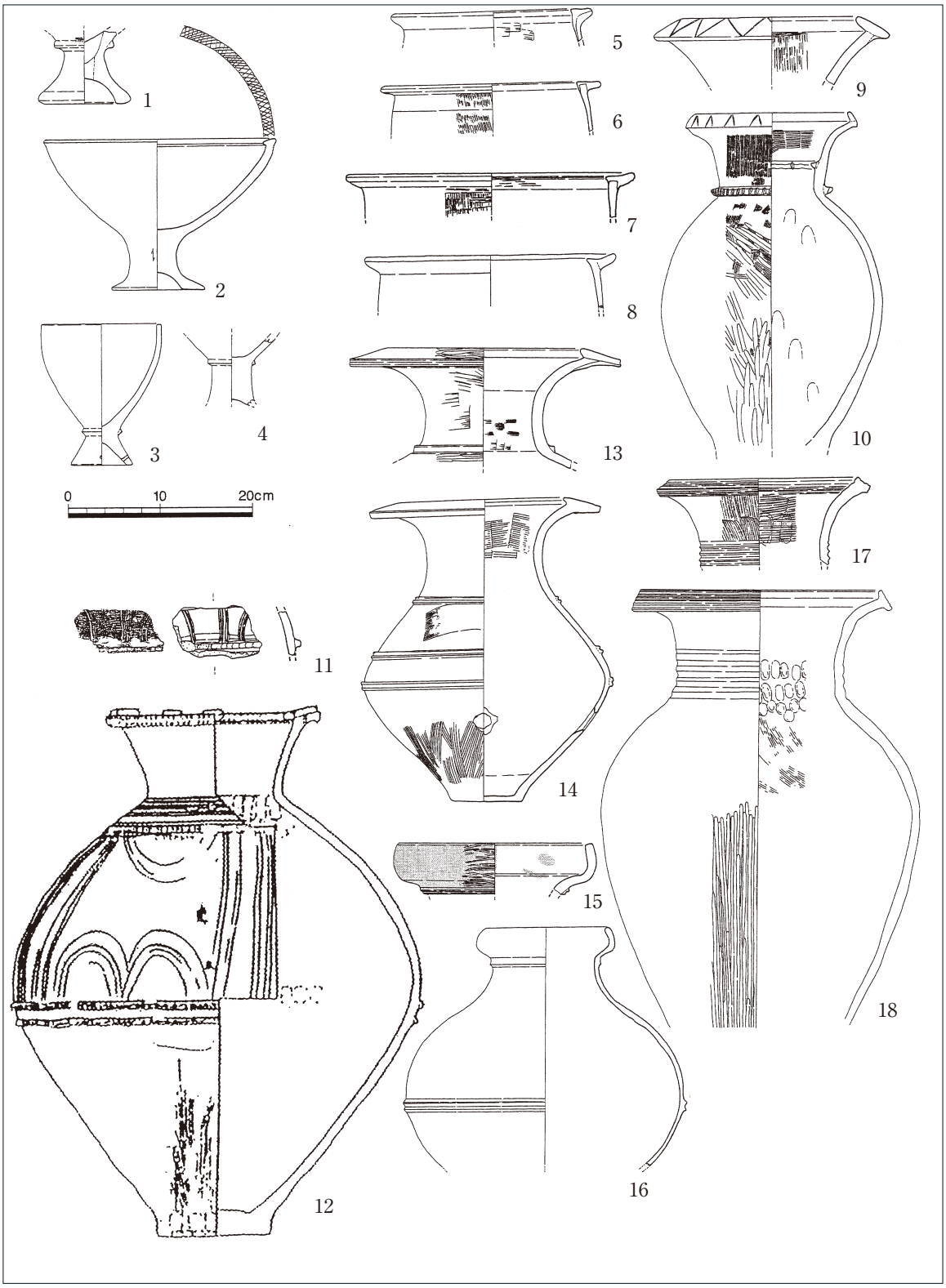

図1　勒島遺跡A地区の弥生土器と関連資料

1・5～7・9・11・13・15・17：勒島A地区　2：行橋市下稗田ⅠA地区47号貯蔵穴　3・4：同ⅢH地区42号貯蔵穴
8：玉名市前田SI40　10：山口市上東SK5063　12：大分市久原　14：前原市三雲八反田Ⅱ−3号住
16：福岡県古賀市鹿部東町土器溜　18：岡山市津寺29号住

同時期の土器中で９割を占め，しかも甕が主体だから，これらを使って炊事する弥生人集団の短期居住区であろう。

これに対して勒島遺跡では，島全体から擬弥生土器も含めて大量の弥生系土器が出ており，弥生人集団の移住とその変容過程，さらには当時の日韓交流を考える上で重要な位置を占める。ただし，勒島遺跡の弥生系土器は全土器量の１割にも満たない（およそ８％ほどか）。これまでは弥生中期初～前半（図１−5･6）が主体とされたが，公表された慶南考古学研究所（A 地区）や釜山大学校（B 地区），東亜大学校（C 地区）の発掘資料をみると，中期後半の土器（図１−11･13･17）も大量に出ている。資料が詳細に報告され，筆者も実見できた A 地区出土弥生系土器［武末 2008a］の概要を中心に述べれば，以下の通りである。

まず土器型式でいえば，上限は弥生前期末までさか上るとみられる高杯脚部（図１−1）があり，下限は丹塗の大型袋状口縁壺（図１−15）からみて弥生後期初頭である。弥生中期前半に併行する時期までを勒島Ⅰ期，中期後半以降を勒島Ⅱ期とすれば，いずれの時期にも，搬入ないし忠実再現の弥生土器のほかに，それぞれが変容した擬弥生土器もある。これらの土器は，甕を主体に壺･蓋･高杯・鉢など器種がそろうことも考えあわせると，弥生人が継続的に渡来し，長期定住したことを示す。また，擬弥生土器には，弥生土器の一部に無文土器の要素がみられる a 類のほかに，無文土器の一部に弥生土器の要素がみられる b 類もある。a 類から b 類に移行するというよりも，両者は同時に共存するようなので，無文土器人の対応という面が強い。これは無文土器の一部に影響を及ぼすほどの移住であったことを暗示する。

これらの弥生系土器の故地は，地理的に近い北部九州でも遠賀川以西地域が主体をなし，口縁直下および頸部中ほどとつけねに突帯をめぐらす袋状口縁壺や，頸部つけねの締まりがゆるくて鋤形口縁をもつ大型の壺からみて，糸島・壱岐系が目立つ。しかし，勒島Ⅰ期には周防・長門地域に特徴的な内接口縁壷（図１−9）があり，ほかにも西瀬戸内海地域，遠賀川以東地域や筑後・肥後地域系の土器があり，こうした地域も含めて勒島との交流がすすめられたとみられる。また，最近では慶尚南道金海市亀山洞遺跡のように城ノ越～須玖Ⅰ式の弥生系土器でも擬弥生土器が主体をなす集落があるため，この時期からは勒島を含むいくつかの交流の結節点が朝鮮半島南岸部に設定されている。このため，対外交流で勒島遺跡だけをあまりに過大評価する必要はないと考える。

この時期，朝鮮半島南部に倭人が移住した理由は，一つには国をまとめるために弥生首長層が青銅武器にみられる古朝鮮の権威を必要としたためであり，もう一つは鉄器とその製作技術の獲得があったことは，萊城遺跡出土の鉄滓からもわかる。(6)

勒島Ⅱ期には弥生中期後半の凹線文土器壺（図１−17）や，下城式壺（図１−11）・黒髪式甕（図１−7）があり，交流の範囲は中九州や東九州地域まで及んで，東瀬戸内地域も含まれる可能性が出てきて，勒島Ⅰ期よりも拡大した。また，後述する楽浪土器も出て，楽浪郡側の交流網ともつながる。

この勒島遺跡では，多くの離頭銛や漁網錘，ヤス，鹿の中手足骨でつくられた有文土器時代以来のアワビおこしや，本来は石で作る鷲山里型を鹿角でつくった東三洞型結合式釣針などの漁具が卓越する。A 地区の石庖丁はわずか２点だから，ここは朝鮮半島南海岸部の海村であった。

ここで注目されるのが，潜水漁用の鯨骨製および鹿角製のアワビおこし［武末 2008b］や，外海用の西北九州型結合釣針などの北部九州系の漁撈具が一定量みられる点である。

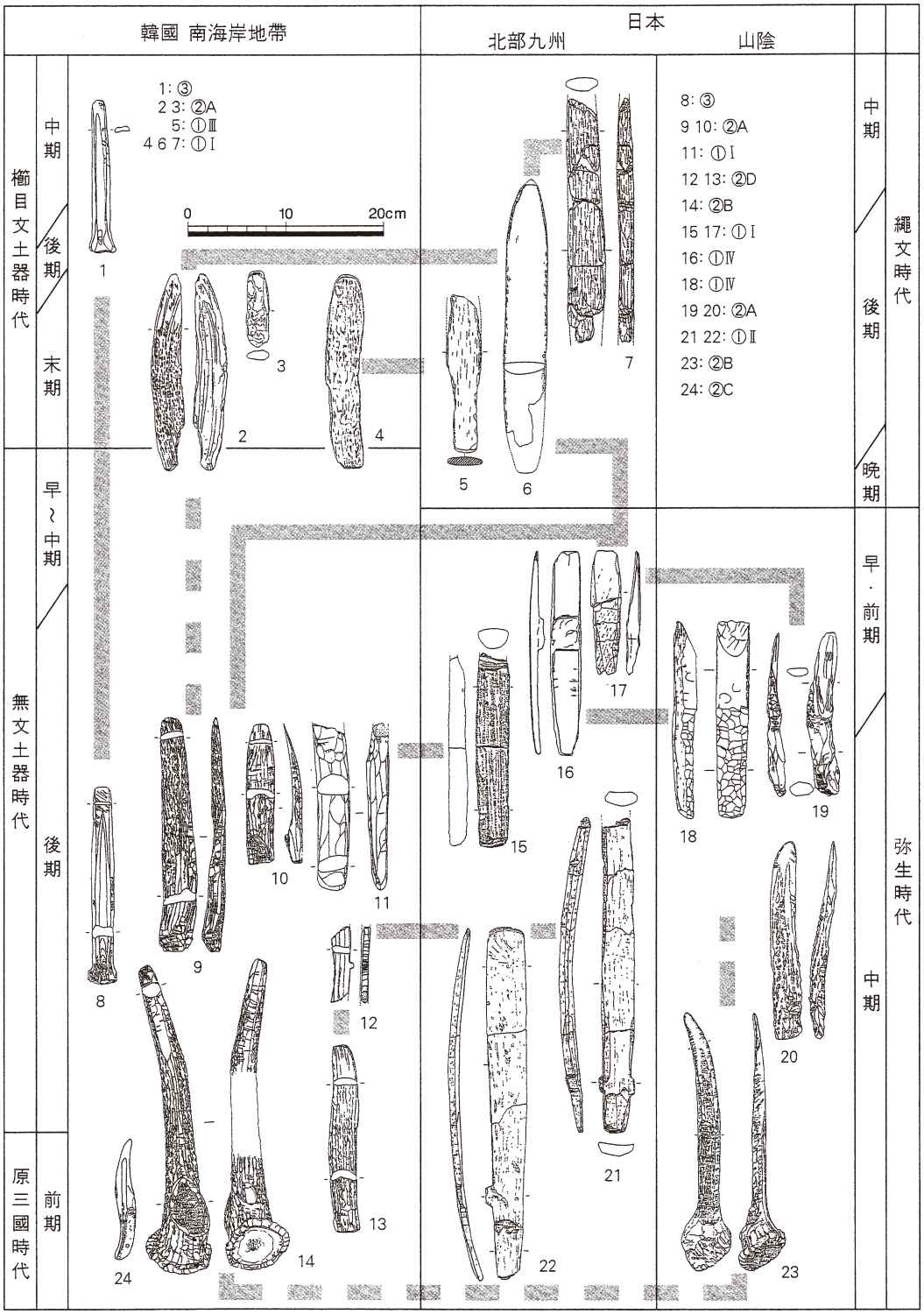

図2　日韓アワビおこしの展開図試案（出土地は出典一覧に付記）

表1　日韓の骨角製アワビおこしの分類

	材質	特徴
①Ⅰ類	鯨骨	両側縁が平行で基部の造り出しはない。
①Ⅱ類		体部・刃部はⅠ類と同様。基部の側面に突起をもつ。
①Ⅲ類		基部と刃部が側面の明瞭な段で区別される。
①Ⅳ類		基部と刃部が裏面の明瞭な段で区別される。
②A類	鹿角	半截した鹿角を用いて，先端部を中心に薄く仕上げる。
②B類		基部に角座をとり込む。
②C類		「く」字形の技角を利用。先端を加工して刃部を作る。
②D類		体部・刃部はA類と同様。基部の側面に突起をもつ。
③類	鹿骨	中手骨や中足骨などの管状骨を縦に二等分。一端をU字またはW字形に調整。

鹿角製アワビおこしは鯨骨製アワビおこしの模倣品で，こうした現象は有文土器時代の東三洞貝塚でも起こっている。鯨骨製が鹿角製の模倣でないことは，有文土器時代でも無文土器時代でも朝鮮半島のアワビおこしは鹿の中手足骨製が基本で，それよりも大型になった鹿角製は東三洞貝塚と勒島遺跡に限られること，北部九州のアワビおこしはすべて鯨骨製で縄文時代中期前半に出現し，縄文時代後期に併行する東三洞貝塚出土鯨骨製および鹿角製アワビおこし［釜山博物館 2007］よりも先行することから証明される。勒島遺跡出土品では勒島Ⅰ期とⅡ期への振り分けが十分にできないが，鯨骨製は筆者分類（表1）の①1類で弥生中期前半がほぼ下限とみられ，そこから派生した②A類は勒島Ⅰ期からⅡ期に存在したとみられる（図2−9·10）。いっぽう基部に突起をもつ鯨骨製の①2類は，北部九州で中期前半に出現したとみられ，勒島ではこの鯨骨製品はまだ出てないものの，それを模倣した②D類（図2−12·13）が厳然として存在する。また，角座を取り込む点で山陰地域と共通するアワビおこし（図2−14）もあり，これも関連が考えられる。したがって，鹿角製西北九州型釣針の存在も勘案すると，勒島遺跡に移住した弥生人の中には，北部九州の「倭の水人」［岡崎敬 1968］がかなり居て，山陰地域の「水人」も一部含まれており，文化変容を起こすほど永く居住した。弥生時代中期には朝鮮半島南部の海村と西日本（とくに北部九州）の海村のあいだには，相互に往来する海村独自の世界が構築されたとみられる。

❹……楽浪土器と中国貨幣

日本の弥生時代後半期の海村で特徴的な遺物にまず楽浪土器がある。

対馬の楽浪土器は多くが半球形平底の洗形鉢で後期の墳墓にみられ，各遺跡1～2点のため「対馬型」と呼んだ［武末純一 1991］が，三韓土器の方が全体的に卓越し，朝鮮半島南部の三韓との日常的な交流が主体であったことを示す。これは，集落遺跡である長崎県対馬市峰町三根遺跡［峰町教育委員会 2002］でも，楽浪土器より赤焼および瓦質の三韓土器が卓越することから裏付けられる。楽浪土器は弥生後期後半～終末が多い。いっぽう壱岐島では，遺跡内に散漫に分布するカラカミ遺跡が古くから知られ，「カラカミ型」としたが，実際の様相は原の辻遺跡で明確になった。原の辻遺跡の楽浪土器と三韓土器は，ほぼ1：1のようである。楽浪土器の大半の時期を後期後半以降に限定しようとする論もあるが［寺井 2007］，滑石混入の植木鉢形土器もあって，三韓土器とともに上限は中期後半まで古くなる。これらの植木鉢形土器は本来は炊事用であり，楽浪人の居住を示すとみられる。

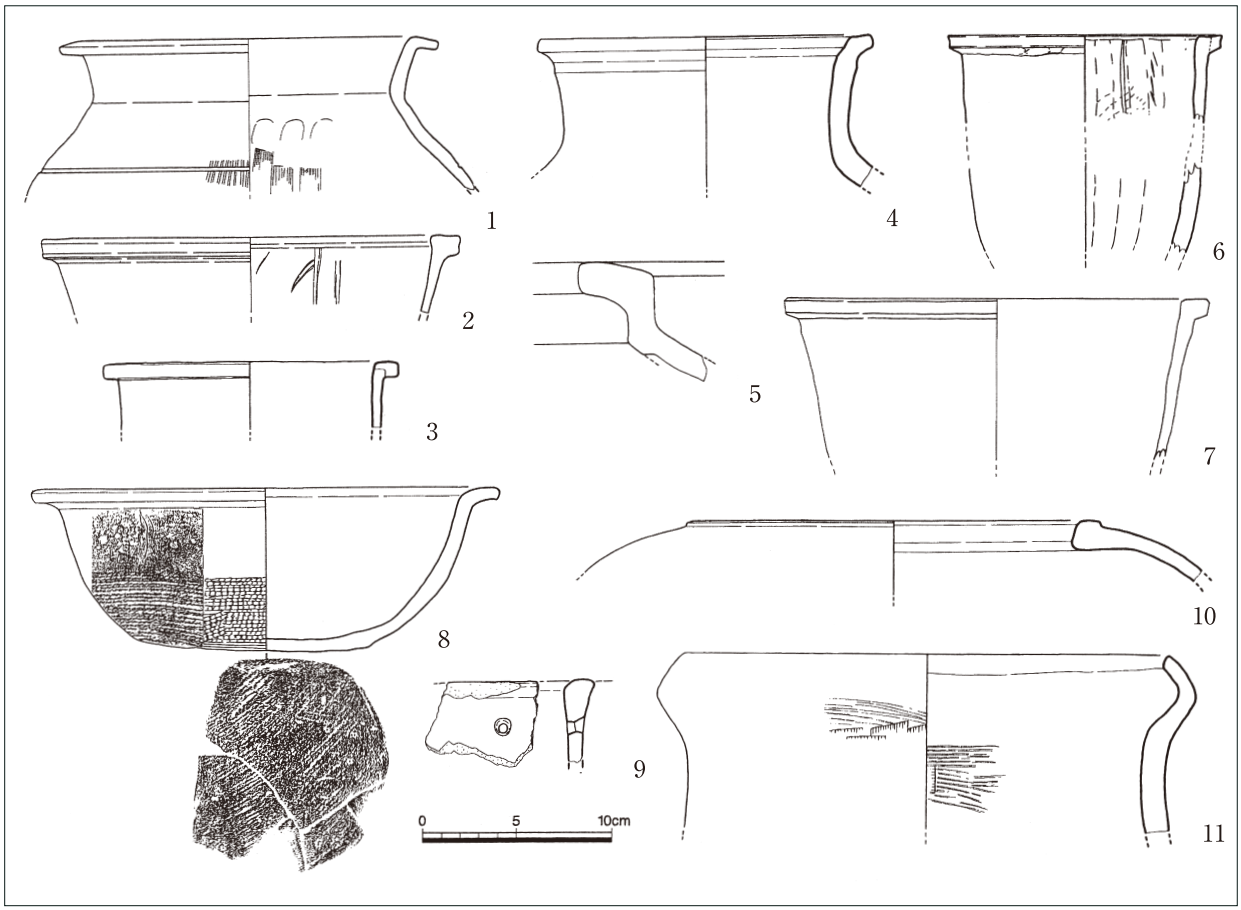

図3　日韓の古式楽浪土器（1～7）と戦国系とされる土器関係資料（8～11）
1･2･8勒島A地区ナ−61号焼成遺構　9同ナ−65号住　3勒島B地区ナ−112号住　4同カ−A 6ピット　10･11同ナ−136号　5新昌洞
6･7原の辻

いっぽう御床松原遺跡では楽浪土器が3点でており，その中の滑石混入土器は，弥生後半期でも古段階に位置づけられる。また，近年調査された福岡市西区今宿五郎江遺跡や元岡遺跡では，弥生後半期でも新段階を中心に楽浪土器が出ている。これらはいずれも伊都国の範囲にあり沿岸部に位置する。伊都国で弥生時代後半期に楽浪土器が卓越することはすでに筆者も述べているが，元岡遺跡では三韓系の土器が多い。一方奴国では三韓土器が多いが，比恵・那珂遺跡で古墳時代初頭頃に楽浪土器が多くなるようである。

このように楽浪土器はほとんど北部九州沿岸部に集中しており，内陸部の遺跡では例外的に伊都国の国邑である三雲遺跡に集中する。とくに番上Ⅱ－5地区土器溜では，わずか88㎡で30点以上の楽浪土器が集中して出土したため，筆者は「番上型」と呼び，楽浪人の集団的居住を想定した。これに対し寺井誠は，「原の辻遺跡も楽浪系土器が多量に出土しているが，」「楽浪系土器だけでは三雲遺跡との差異を見出せない」とする［寺井誠 2007］。しかし筆者は楽浪系土器の量だけで，原の辻遺跡も含まれる「カラカミ型」（今後は「原の辻型」とする）と，「三雲番上型」をわざわざ分けて設定したのではない。原の辻の楽浪土器が広く散漫に出るのに対して，三雲では番上地区に集中しており，ほかの地区ではあまり出ないという明確な差異があるのである。また，広く掘られた

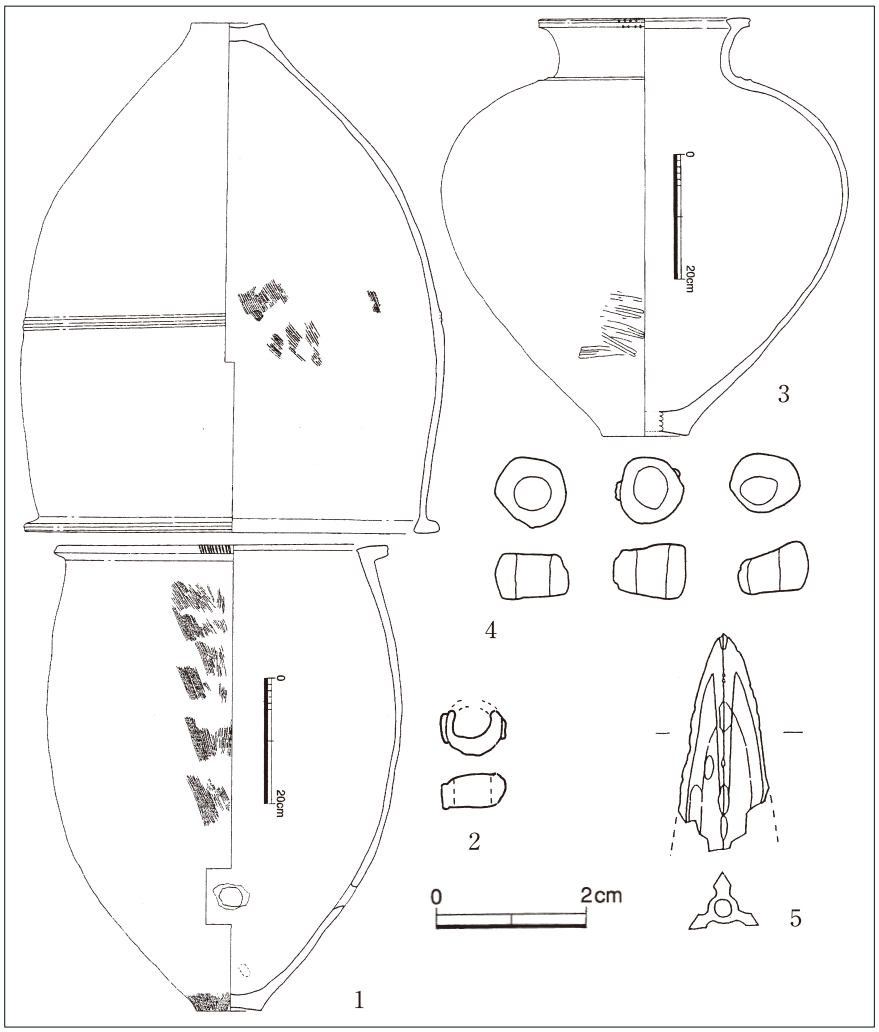

図4　原の辻遺跡大原地区（1～4）と不條地区（5）の戦国系資料
1（K2）　2（K2副葬品）　3（K3）　4（K3副葬品）　5（平成10年度不條地区E16号土坑60号墓）

原の辻遺跡とほんの一部しか掘っていない番上地区の量は同等に扱えない。さらに，寺井氏は「西新町遺跡における朝鮮半島系土器の出土量や器種の揃い方と比較すると，「集団的居住」の要素が少な」いとする［寺井誠 2007］が，西新町遺跡はやはり番上地区よりもはるかに発掘面積が広く，しかも一つの竪穴住居で多くの土師器の中に 2~3 点朝鮮半島系土器が出るのが一般的で，番上ほどの集中度は示さない。また，西新町遺跡と番上地区とでは時代も異なる。それでも比較するのであれば，西新町遺跡の 88㎡の発掘区で何点の朝鮮半島系土器が出るのかを算出してから論ずるべきであろう。おそらく 88㎡あたりに直せば，一番集中する発掘区でも 2 点～ 3 点ではないかとみられる。(7)

こうした楽浪土器は勒島遺跡 A 地区でも勒島Ⅱ期にみられ，ナ－61 号焼成遺構では，炊事用の滑石混入植木鉢形土器や口縁上部が外方に折れて突出し胴部縄蓆文の短頸壺が，須玖Ⅱ式の広口壺に伴う。これは楽浪人の居住を示す。このほかＢ地区でも滑石混入の植木鉢形土器や瓦質短頸壺［李昌熙 2004］，C 地区でも瓦質短頸壺や光州市新昌洞遺跡で出たような口縁上部が内側に折れて突出

する球形壺が出ている［国立中央博物館 2001］。いずれも破片で日常生活に使用され，植木鉢形土器からみて楽浪人も居住したとみられる。こうした古式楽浪土器（図3−1～7）の出土は，対馬のセノサエ遺跡でもみられ，朝鮮半島南部の西海岸から南海岸部，さらには北部九州にかけて，弥生時代後半期のはじめには，それぞれの地域の交流網が一本の線で結ばれたことを示す。

いっぽう鄭仁盛氏は，勒島A地区で出た直立口縁で焼成後に孔を穿つ滑石混入土器や底部に横方向の縄目叩きが観察される鉢，B地区ナ−136号住居で出た内屈して口縁部が肥厚する滑石混入土器（図3−8～10），あるいは慶尚北道星川礼山里3号墓の短頸壺をとりあげ，これらの出土品は楽浪土器よりも燕下都あるいは高麗寨遺跡，牧羊城遺跡との類似性が高いとする［鄭仁盛 2008］。そして三韓瓦質土器の技術的起源を戦国系灰陶に求めて，「洛東江流圏の人々が最初に中国系灰陶に直面する時期は，洛東江流域圏が遼東半島と韓半島西北地方はもちろん，日本列島と沖縄までを連結する国際交流網に編入される紀元前3世紀末まで遡る可能性がある。」という。これを後押しする資料には，原の辻遺跡大原地区の城ノ越式に属する2号甕棺墓および3号甕棺墓出土トンボ玉や，城ノ越式から須玖Ⅰ式の平成10年度不條地区E16号土壙出土の三翼銅鏃がある（図4−5）。

鄭氏は当初，礼山里3号墓が茶戸里1号墓や朝陽洞38号墓よりさかのぼらず，紀元前1世紀が上限であるとした［鄭仁盛 2008a］。その後，茶戸里1号や朝陽洞38号墓よりも古い朝陽洞5号墓と同時期だが，朝陽洞5号自体よりは1段階新しいと考えている［鄭仁盛 2008b］。筆者も礼山里3号例は朝陽洞5号と同時期で紀元前2世紀までさか上る可能性が高いとみる。しかし，戦国系とされた勒島遺跡出土品は勒島Ⅰ期にさかのぼったとしても搬入品とみられ，B地区の内屈肥厚口縁壺（図3−10）は，滑石の太い粒が入る沖縄出土品とはやや差異があり，同じ竪穴住居から出た土器（図3−11）の時期は弥生後期初頭併行である。また，全体的な量からみても，恒常的で安定的な国際交流網とまでいえるかは疑問が残る。なによりも，確実な紀元前2世紀の三韓瓦質土器のセット提示と，衛満朝鮮期の土器相の解明がまず必要で，楽浪初期の土器相も十分に把握できた段階ではないと考えている。全体として鄭氏の問題提起は重要だが，まだ今後の検討課題が山積みの段階といえよう。

また三韓土器の成立とは，一時点で外からの影響がありその後は内部で自動的に展開するものではなく，継続的に外からの影響を受けながらある時間幅をもって進行したと考える。じっさい，鄭氏も認めるように，袋壺の製作技術には楽浪土器の技術が入っており，やはり三韓瓦質土器の成立時に与えた楽浪土器の影響は大きかったと考えている。

いま一つ海村の特徴的な遺物に中国銭貨[(8)]がある。これまで御床松原遺跡（新町遺跡を含む）で6点（半両銭2点，貨泉4点），原の辻遺跡では15点（五銖銭1点，大泉五十1点，貨泉11点，不明銭2点）が出て，元岡遺跡は9点（五銖銭1点，貨泉8点），今宿五郎江遺跡は5点［森本幹彦 2008］である。また楽浪土器こそ出ていないが，鳥取市青谷上寺地遺跡では大量の漁撈具が出ており，貨泉4点が出た。ほかに大阪府亀井遺跡は貨泉4点，岡山県高塚遺跡は貨泉25点でいずれも当時の海に隣接して立地する。これら4点以上をもつ中国銭貨出土遺跡は，原の辻遺跡を除くといずれも国の拠点集落ではなく，日常生活域は小さい[(9)]。またこれらは墳墓ではなく，日常生活域から出る点にも特色がある。

いっぽう巨大な集落遺跡では，とくに北部九州の場合，三雲南小路や須玖岡本D地点のような

表2　朝鮮半島南部の原三国～三国時代前期の中国貨幣

番号	出土地・出土遺構	遺構の性格	種類と数量	遺構の年代	文　　献
1	ソウル特別市風納土城慶堂地区 101 号	祭儀	五銖銭 1	3 世紀後半	韓神大 2005
2	江原道江陵市草堂洞江陵高等学校 化粧室増築敷地 1 号住居跡	住居跡	五銖銭 2	1 世紀中～後半	江原文化財研究所 2005
3	京畿道仁川市中区雲南洞 B 地区貝塚遺跡 (永宗島永宗地区) B 2 貝塚	貝塚	五銖銭 1	3 世紀	金武重氏教示
4	全羅北道完州郡上雲里遺跡カ地区 1 号墳 2 号土壙墓	土壙墓	半両銭 2	4 世紀中～後半	金承玉・李澤求 2004
5	全羅南道海南郡群谷里貝塚 B2 ピット 11 層	貝塚	貨泉 1	1 世紀中頃	木浦大学校博物館 1987
6	全羅南道羅州市郎洞遺跡推定低湿地	低湿地	貨泉 2	4 ～ 5 世紀	全南文化財研究院 2006
7	全羅南道麗水市三山面西島里巨文島	難破船	五銖銭 980	1 ～ 2 世紀(?)	池健吉 1990
8	慶尚南道金海市鳳凰洞会峴里貝塚 (金海貝塚)d	貝塚	貨泉 1	1 世紀	朝鮮総督府 1923
9	慶尚南道昌原市茶戸里遺跡 1 号墓	木棺墓	五銖銭 3	前 1 世紀	李健茂ほか 1989
10	慶尚南道昌原市城山貝塚	貝塚	五銖銭 1	前 1 世紀	崔夢龍 1976
11	慶尚南道泗川市勒島貝塚 C 地区貝塚	貝塚	半両銭 4 五銖銭 1	前 2 世紀～紀元前後	李東注 2004
12	慶尚北道慶山市林堂洞 A － 1 地区 74 号墓	木棺墓	五銖銭 1	1 世紀初	韓国文化財保護財団 1998a
13	慶尚北道慶山市林堂洞 A － 1 地区 121 号墓	木棺墓	五銖銭 1	1 世紀初	韓国文化財保護財団 1998a
14	慶尚北道慶山市林堂洞 A － 1 地区 132 号墓	木棺墓	五銖銭 1	1 世紀初	韓国文化財保護財団 1998b
15	慶尚北道永川市龍田里遺跡	木棺墓	五銖銭 3	前 1 世紀	国立慶州博物館 2007
16	済州道済州市健入洞山地港	退蔵	五銖銭 4 貨泉 11 大泉五十 2 貨布 1	1 世紀	梅原末治・藤田亮策 1947
17	済州道北済州郡金城里石列住居跡	住居跡	貨泉 2	2 ～ 3 世紀	済州史定立事業推進会 2001
18	済州道北済州郡終達里貝塚遺跡 5 層	貝塚	貨泉 1	1 世紀	国立済州博物館 2006
19	(伝)済州道		五銖銭 11 大泉五十 5		李清圭・康昌和 1994

＊金京七2007を元に改変・追加して作成した。時期も金京七2007に従った。

30 面前後の中国鏡を集中保有する王墓を頂点にして，周囲に完形中国鏡を副葬する例が多い。これに対して，海村では原の辻遺跡を除くといずれも中国鏡は鏡片ばかりで点数も少なく，完形鏡は全くなくて，集落の規模と保有する中国鏡の質・量は比例する。ところが，中国銭貨は，20 万㎡をこえるこうした国邑級の遺跡では，三雲遺跡 0 点，須玖遺跡 1 点（貨泉），平塚川添遺跡 1 点（貨泉），吉野ヶ里 1 点（貨泉），文京遺跡 0 点，唐古 0 点，池上曽根遺跡 0 点，伊勢遺跡 0 点，「都市」と喧伝され交易の拠点とされる比恵・那珂遺跡［久住 2008］も 0 点で，集落規模とはむしろ反比例的である。青谷上寺地遺跡には，鹿角製アワビおこしが多数みられ，西北九州型結合釣針も存在するから，北部九州の海村を介して中国・朝鮮とつながっていたことは確実である。

朝鮮半島南部でも南海岸地帯を中心に中国銭貨の出土例が増加し，集成的研究もなされた［金京七 2007，国立慶州博物館 2007］。それらをもとに作成した表 2 を通観すると，沿岸部での日常生活域からの出土品と，内陸部にかけての墳墓出土品に大別される。後者は慶州北道慶山市林堂洞遺跡 A － 1 － 74 号墓，A － 1 － 121 号墓，E － 132 号墓から各 1 点，慶尚北道永川市龍田里遺跡木棺墓 3 点，慶尚南道昌原市茶戸里 1 号墓 3 点が属し，いずれも前漢代の五銖銭で，副葬時期も紀元前 1 世紀である。いっぽう前者の勒島遺跡では C 地区で前漢代の五銖銭 1 点と半両銭 4 点（合計 5 点）が出ており，報告書は未刊だが，中期後半併行期の可能性がもっとも高い。貨泉は済州市山地港で貨布や大泉五十，後漢の五銖銭とともに出ていて，共伴の中国鏡や小型仿製鏡からみても時期は 1 世紀とみられる。城山貝塚，金海貝塚，郡谷里貝塚からの出土も，海村との結びつきを証明する。

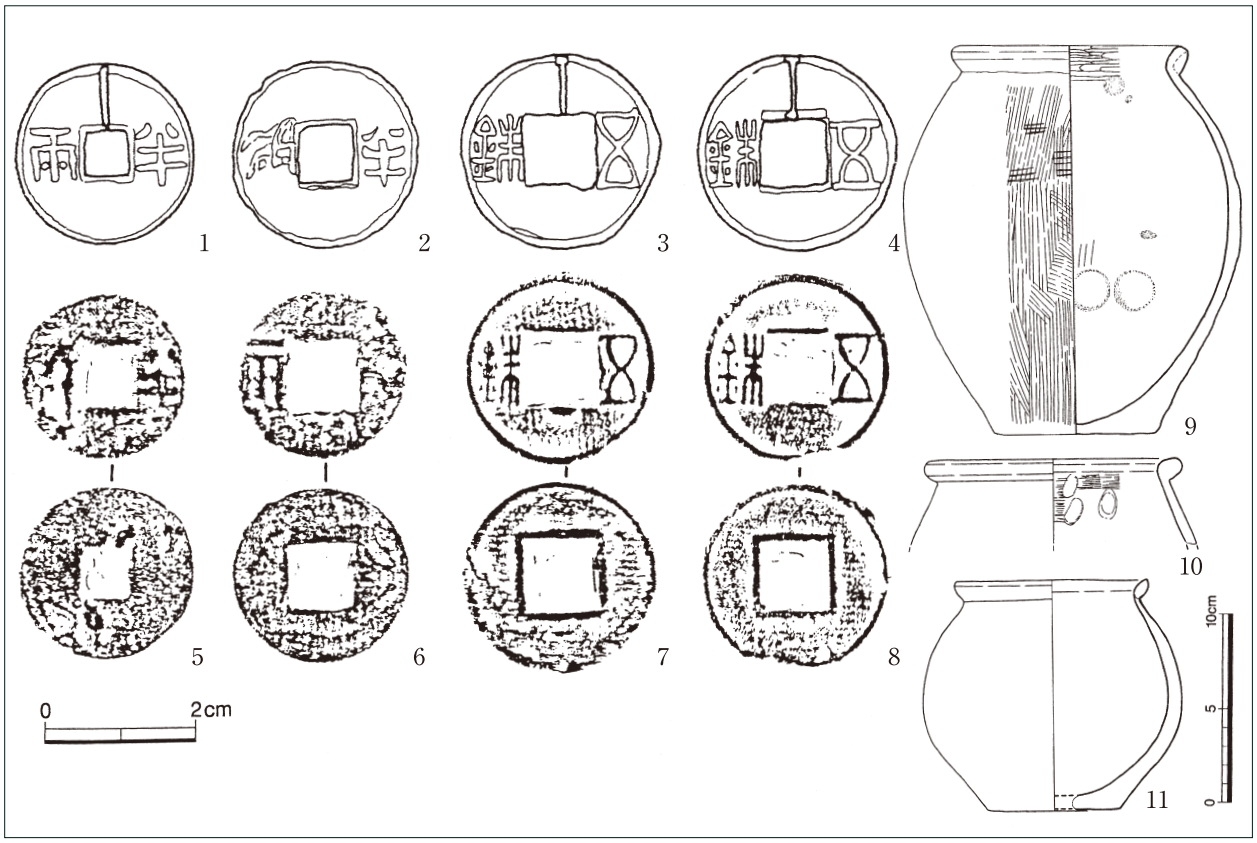

図5　沖ノ山の中国銭貨（1～8）と埋納甕（9）および勒島遺跡出土比較資料（10・11）
1･2･5･6 半両銭　3･7 五銖銭　4･8 穿上横文五銖銭　10 勒島A地区N3E2グリッド貝塚　11 同タ－1－1号竪穴

そして林堂洞遺跡など拠点集落の日常生活域での出土はないから，海村に集中する傾向は朝鮮半島南部でも同様である。

また，勒島など最近の例からみて，日本列島の五銖銭や半両銭の上限も紀元前1世紀とみられる。とくに御床松原遺跡の半両銭は，後期後半とする意見もある［志摩町教育委員会 1988］が，包含層の土器には中期後半の土器もある。包含層形成の下限は後期後半だが，その中に含まれる半両銭の上限は中期後半までさか上る可能性を残している。岡山県高塚遺跡の貨泉は，共伴した土器からみても紀元後1世紀代に位置づけてよく，日本列島の貨泉の使用時期の上限は後期前半までさか上る。

西日本と朝鮮半島南部の海村に中国銭貨が集中し，しかも海村では墳墓の副葬品ではなく，日常生活域から出ることは，それらが威信財ではなく，海村の日常的な活動の中で用いられたことを示す。つまり交易の場で中国銭貨を対価として使用した可能性が高くなるのである。この推定を裏付けるのが，日韓の沿岸部で大量に発見された中国銭貨で，具体的には全羅南道麗水郡巨文島の五銖銭980点（図6）と山口県宇部市沖ノ山の116点（半両銭20点，五銖銭90点）以上の例である。

巨文島例は難破船とみられ，五銖銭は前漢と後漢の二者があるとされたが，李栄勲･李陽洙氏は，前漢代とする［国立慶州博物館 2007］。今後の詳細な再検討に期待したいが，貨泉が1点もないことは注意される。

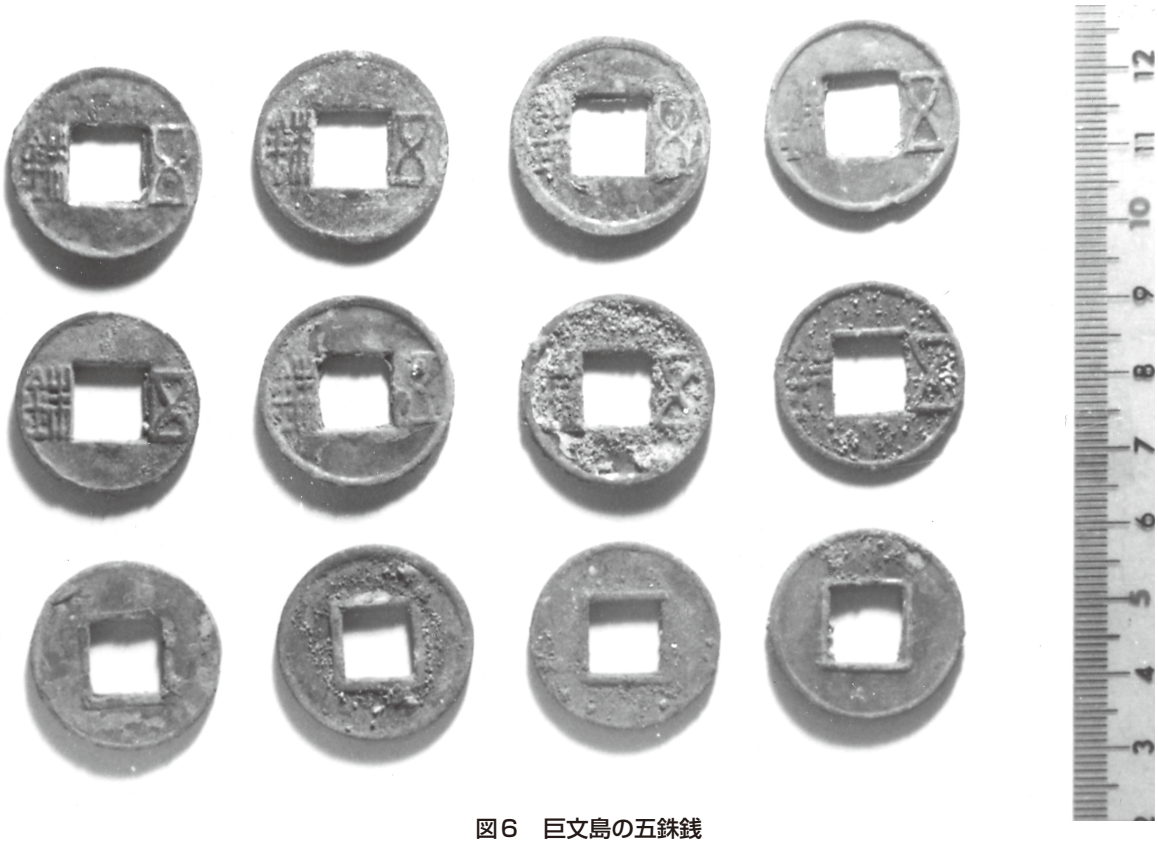

図6　巨文島の五銖銭

沖ノ山例は周知のように江戸時代に発見され，納められていた容器は中期後半代の擬無文土器甕である［小田富士雄 1982］（図5）。古賀信幸氏・豆谷和之氏は「この甕の口縁下11～12cmから下の内面には，ほぼ全周にわたって円形の緑青が付着した痕跡が観察できる」ことからレプリカを作成し古銭の代用として10円硬貨を入れてみたところ，「10円硬貨135枚では最上部が口縁下15～16となり，埋納甕に近い状況にはならなかった」ため，同様な状況を得るためには，500枚以上の10円硬貨を必要とすることが判明したと指摘する［古賀信幸・豆谷和之 1995］。この土器の時期については，同様な口縁形態の無文土器系赤焼甕や鉢が勒島遺跡で出ており（図5−10･11），弥生時代後期初頭併行期の赤焼甕とは明らかに異なるため，弥生中期後半の無文土器系の土器としてよい。

こうした大量出土例は，海村での中国銭貨の出土が大量流通の痕跡であることを暗示する[(10)]。国産青銅器鋳造の原料と考えるには，鋳型が出た鋳造工房との結びつきが希薄である。

朝鮮半島内陸部の五銖銭副葬地帯と南海岸の海村地帯の接点に位置する茶戸里1号墓の筆と文房具系遺物（素環頭刀子，銅環，五銖銭）について，李健茂氏はかつて，これらの筆が筆記用であることを論証するとともに，銅環を両皿天秤にものをのせて重さをはかる砝碼とした。そして両皿天秤こそ出てないものの，鉄の地金（2点1組でさし合わせにして紐でくくった梯形鋳造鉄斧）をもって中国の漢または楽浪と交易し，その内訳を筆で記録し，まちがえた文章の内容訂正や削除を書刀（素環頭刀子）でおこない，代価の銭（五銖銭）を天秤と砝碼（銅環）ではかるという被葬者像を描き出した［李健茂 1992］。その後，原の辻遺跡では弥生時代後期の棹秤の錘である銅権が出て，島根県田和山遺跡には中期後半の楽浪系石硯・研石があり［松江市教育委員会ほか 2005］，勒島遺跡B地区カ－245号住居では鋳鉄製の権や楽浪製石硯，嶺南地域産の梯形鋳造鉄斧に中期後半の弥生

土器が共伴し［李昌熙　2007］，勒島遺跡A地区の報告書の考察では石権が提起された［慶南考古学研究所2006d］。これらを勘案すると，弥生時代後半期の日朝の海村では，交易の際に棹秤で代価の銭をはかり，それを文字で記録したことが考えられる。そうした交易の主な品目は，棒状や板状あるいは板状鉄斧や梯形鋳造鉄斧などの原料鉄（銑鉄状態のもの）と鉄素材（鋼状態のもの）であったとみられる。

また，先述のように三雲遺跡では番上地区に楽浪人の居住が考えられ，八龍地区の大溝からは弥生後期後半の大甕の頸に「竟」字がヘラで刻まれているから，ここでも渡来楽浪人を中心とした文字の使用が考えられる。しかし，ここでは中国銭貨は無いから，彼らは北部九州の国々の連合体であるツクシ政権と朝鮮・中国との公的な外交活動の方面に深く関わり，海村世界で展開した経済的な交易活動とは，一線を画したとみられる。

つまり，弥生後半期には，対馬と朝鮮半島南海岸地帯との日常的な交流活動が基礎にあり，その上に日朝両地域の海村世界での交易活動が展開し，さらに上層部にツクシ政権の首長層と中国王朝

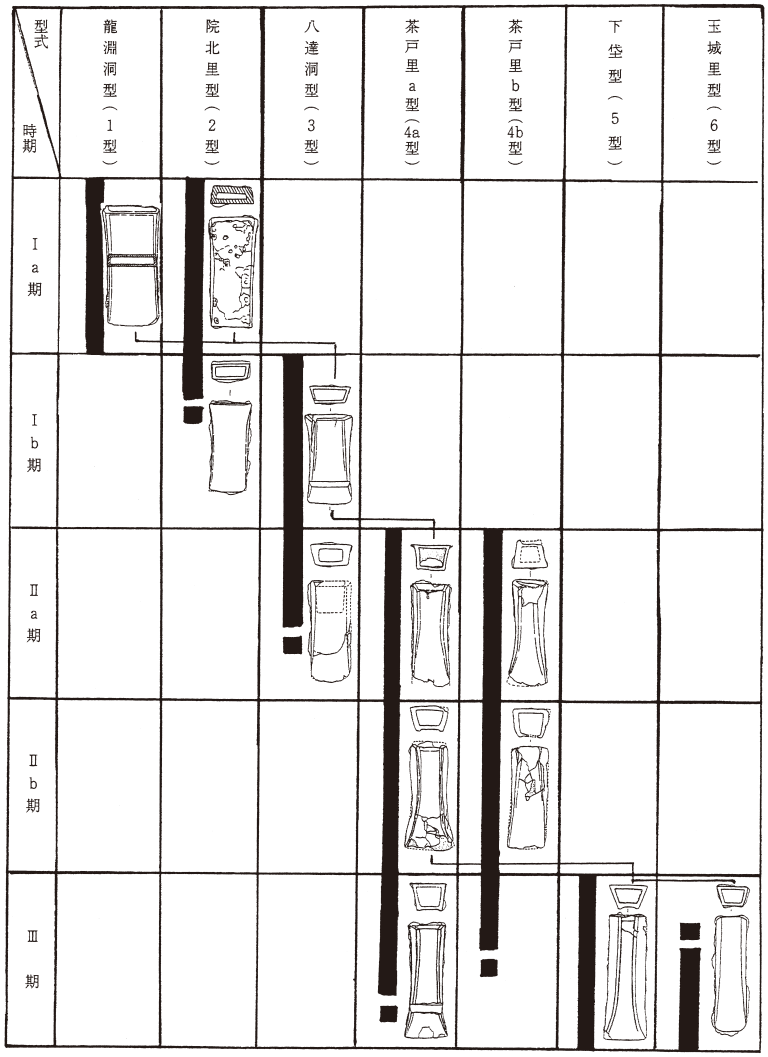

図7　朝鮮半島南部の鋳造梯形鉄斧変遷図

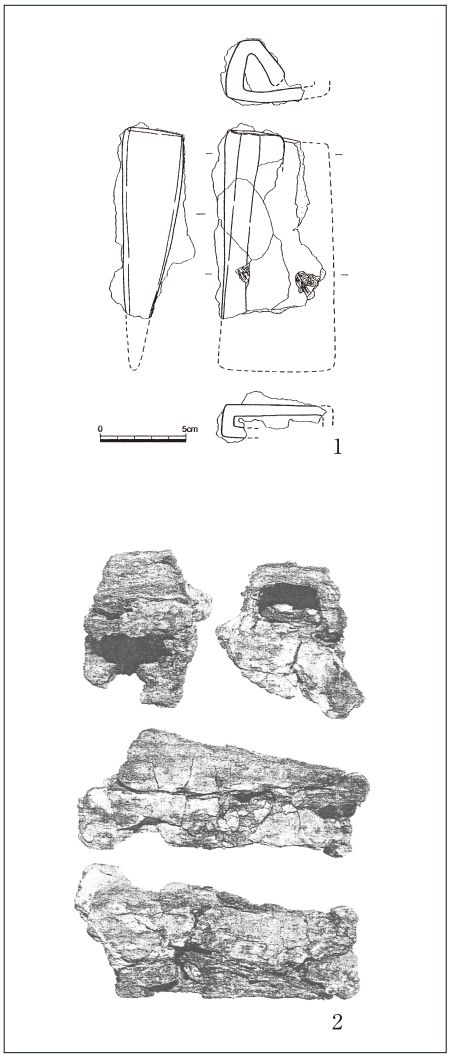

図8　勒島遺跡の鋳造梯形鉄斧
1 A地区貝塚カ層　2 B地区カ－245号住

本土や楽浪・帯方郡との外交交渉が位置するという三重構造が形成されたのである。もちろん三者は全く別個の存在ではなく，ツクシ政権の中国王朝などへの公的遣使に，北部九州沿岸の海村や対馬の人々も深く関わったとみられる。

❺……冶金遺構と鉄素材，原料鉄

三韓と倭の交易の主な品目には，棒状品や板状品のほかに大形板状・棒状の鉄斧や鋳造梯形鉄斧もあって日本列島での鉄素材・原料鉄と考えられる。

筆者がいま注目しているのは鋳造梯形鉄斧［武末 2006］で，朝鮮半島では２点１組で使用され刃部が丸くなった農具の例もあるが，勒島Ａ地区貝塚カ層の打ち壊された例（図８−1）や，茶戸里１号墓の２点１組でくくられ中型の土がつまった有名な例，あるいは勒島Ｂ地区カ−245 号住居跡の使用痕がなく逆向きに２点を一組にして差し合わせた例（図８−2）などからすると，原料鉄でもあった。

特に弥生時代の日本列島例は，兵庫県大平遺跡出土例を除くといずれも破片である（図 9）。さきに西日本の出土例を集成した際には，九州では壱岐・対馬に限られ，しかも側縁突線がないのに対して，中国・四国地域では側縁突線をもつ例があって，異なる生産地から入手した可能性を示唆した［武末 2006］。その後，九州では雲透遺跡 SX202（中期初頭〜前半）と，福岡県春日市須玖遺跡盤石地区２次１号住居（中期後半および後期終末の土器が出土）でも出ていたことを知った［唐津市教育委員会 1998，春日市教育委員会 2008］。盤石例は側面が中膨らみの横断面形からみれば，中期後半にさかのぼってかまわない古式の形態で，勒島Ａ地区と同時期の可能性がある。また，中国・

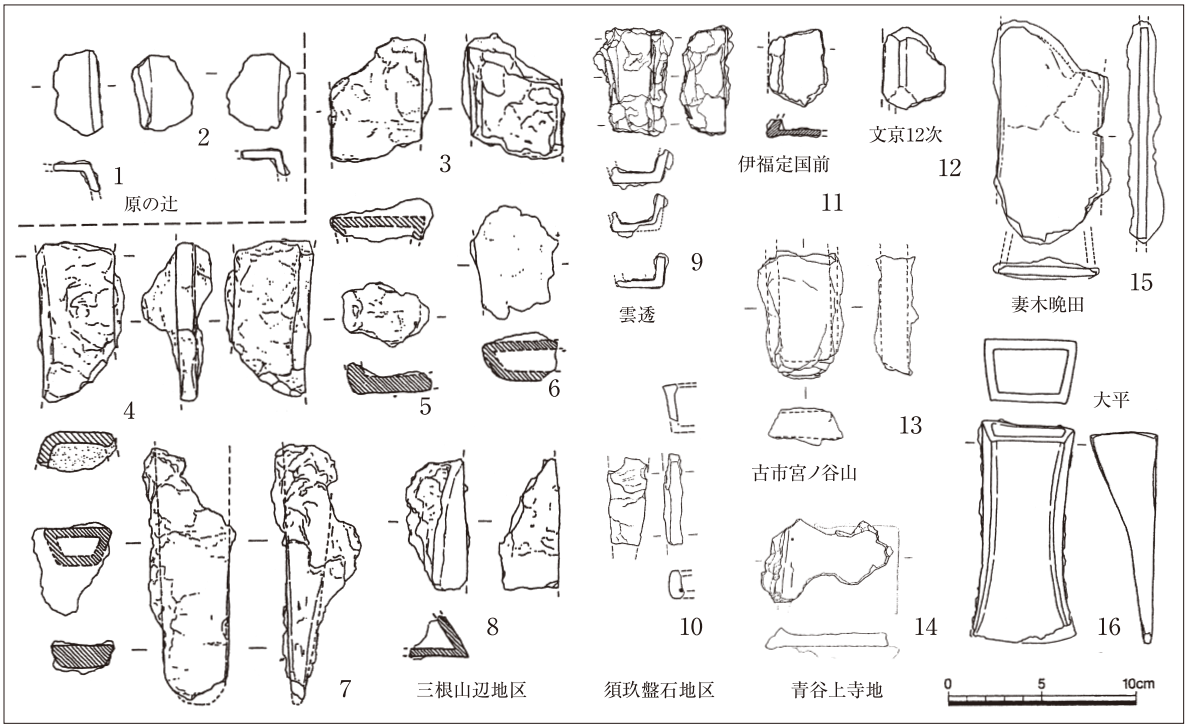

図９　日本列島の弥生時代鋳造梯形鉄斧

四国地域では青谷上寺地遺跡3区SD20（後期初頭～後葉）の鉄鋤先に付着した例［（財）鳥取県教育文化財団 2002a］があり，鳥取県米子市古市宮ノ谷山遺跡竪穴住居2（後期後葉）でも出土していた［（財）鳥取県教育文化財団 2002b］。古市宮ノ谷山例は，提示された図では側縁突線がない。青谷上寺地例は側縁突線をもつ幅広でⅠ型の破片とみられ製作時期は紀元前3～2世紀とみられる。両端を折り返した鉄刃に付着していて，青谷上寺地での時期は後期（紀元後1世紀以降）である。製作時期自体は古いが，おそらく破片で持ち込まれたものであろう。これらの新資料を追加しても，日本列島例の多くが破片であり，しかも九州の例では側縁突線がなく，中国・四国地域の多くに側縁突線がある点は変わらない。青谷上寺地例からみても，これらは鋼精錬をして鉄素材にするための原料鉄であったとみられる。

こうした鋼精錬で注目されるのが，長崎県対馬市三根遺跡山辺地区に集中する鋳造梯形鉄斧片で，ここでは椀形滓なども伴う。ただし，山辺地区では古墳時代の遺物も同一層にあり，弥生時代の冶鉄関連遺物を厳密に抽出できない。これに対して勒島遺跡A地区では，炉のほかに送風管（棒に植物質の繊維を縦方向に並べて捲き付け，更に植物の繊維で縛ってから，粘土を巻き付けて作る）や炉壁，鉄滓，鍛造剥片もある。送風管の大きさから見て鍛治のほかに精錬もしたとされ，鋳型や中子は出ていないが，分析結果では溶解炉でできたとされる鉄滓もある。弥生中期後半から後期のこうした日朝の海村では，単に南北のものをそれぞれ仲介するだけでなく，一部は加工し付加価値を高めて交易したことを示す好例といえる。

おわりに

本稿では弥生時代の海村を設定する根拠に，漁具の卓越だけでなく，石庖丁が一般の農村の5分の1程度である点を新たに追加した。こうした海村は，対岸にある朝鮮半島南部の沿岸部にも，勒島遺跡だけでなく，海上交易の結節点として幾つか存在したと見られる。

弥生時代の前期末から中期前半には，日本列島各地での国の形成に伴って，朝鮮半島南部との相互交流が本格的に始まる。渡来した後期無文土器人集団は，拠点集落の周縁にありながら中心を制御する形で国づくりを促進した。

いっぽう，勒島遺跡の弥生人集団には，西北九州型結合式釣針や鯨骨製・鹿角製アワビおこしなどの漁具から見て，北部九州の「倭の水人」が多数含まれていた。また，山陰地域でも西北九州型結合式釣り針や，鯨骨製アワビおこしをもとにした鹿角製アワビおこしがあり，海村のつながりができていたと思われる。

そして，弥生後半期になると，西日本と朝鮮南部の海村には楽浪土器や中国銭貨が目立つようになり，近畿から楽浪・帯方郡までの交易網に組み込まれたと見られる。とくに中国銭貨は，中国鏡とは対照的に，海村の日常生活域から多数出土して，国の中心となる巨大農村やそこから展開した都市的集落ではほとんど出ない。したがって中国銭貨は，漁撈とともに海村の生業活動の主体である交易活動の場で，対価として用いられたことを推測した。また，交易の対象物は原料鉄や鉄素材であったと見られ，海村の南北市糴とは，南の物資を北に，北の物資を南に単に移動させるだけでなく，中間で加工して付加価値をさらに高めた可能性を述べた。交易の場における権や文字の使用，

倭からの交易品目などについては，別稿を期したい。

【謝辞】 成稿にあたっては下記の皆様より御教示・御協力をいただいた。心より謝意を表する次第である（順不同・敬称略）。

李健茂・崔鍾圭・李榮勲・李陽洙・金武重・李東冠・洪潽植・全玉年・鄭仁盛・安楽勉・小田富士雄・島津義昭・中尾篤志・山中英彦・石橋新次・宮崎貴夫・常松幹雄・比佐陽一郎・重藤輝行・大野哲二・平尾和久・豆谷和之・阿比留伴次・齋藤瑞穂

（2008 年 9 月 30 日稿了）

註

（１）――海上交易活動を重視すれば港市や港津などの呼び方もあろうが，漁撈活動が基盤になっていることを強調するためにも，いまのところ海村と呼んでおく。今後もっと適切な名称が提唱されるならば，それに従いたい。ただし，名称ではなく「いかにあるか」という中身こそが重要だと考える。

（２）――弥生時代の諸相は，早期から中期前半の前半期と，中期後半から後期の後半期に大別して理解するのが至便だと考えている。

（３）――唐津市雲透遺跡 SX － 102（弥生中期初頭～前半）から基部に突起をもつアワビおこしが出ている。

（４）――諸岡遺跡は板付遺跡の，横隈鍋倉遺跡などは三国丘陵遺跡群の周縁部にある。吉野ヶ里遺跡の擬無文土器も南側の周縁部で出る。

（５）――一般的には倭系遺物だが，ここでは時代を特定しているため弥生系遺物としておく。倭人についても弥生人とする。また，変容品も含めたため弥生系とした。

（６）――いっぽう後期無文土器人側に立てば，古朝鮮の諸国にとって北九州は開発に値するフロンティアで，古朝鮮と同様な国をつくり，技術を移転して，彼らの世界を拡大する目的を考えたい。

（７）――筆者が 12 次調査区出土品を，破片も 1 点と数えて概算したところ，88㎡では 3 点未満であった。

（８）――日本の出土例については，比佐陽一郎氏より増補された全国古代中国銭出土一覧を提供していただき，それをもとに検討した。

（９）――今宿五郎江遺跡では円形環溝がめぐるが，その規模は 3 万㎡ほどで，国の拠点集落の規模にはとても及ばない。

（10）――このほか内陸部ではわずかに副葬例が見られるが，1 基の副葬枚数は基本的に少ない。

参考文献

〈日文〉

梅原末治・藤田亮策　1947：『朝鮮古文化総鑑Ⅰ』.

大分市教育委員会　2005：『下郡遺跡群Ⅲ－大分市下郡知久土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 61 集.

大阪府立弥生文化博物館　2004：『大和王権と渡来人－三・四世紀の倭人社会－』平成 16 年後期特別展.

岡崎　敬　1968：「倭の水人」（『日本民族と南方文化』平凡社）.

岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹　2004：「三坂七尾地区墳墓出土貨泉について－全国古代中国銭出土一覧－」（『福岡考古』第 21 号）.

小田富士雄　1982：「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」（『古文化談叢』第 9 集）.

小田富士雄・韓炳三編　1991：『日韓交渉の考古学』弥生時代篇，六興出版）.

春日市教育委員会　2008：『須玖岡本遺跡 2』春日市文化財調査報告書第 53 集.

樋本杜人　1957：「金海貝塚の甕棺と箱式石棺－金海貝塚の再検討（承前）－」（『考古学雑誌』43－1）.

唐津市教育委員会　1998：『雲透遺跡』（Ⅱ）.

久住猛雄　2008：「福岡平野　比恵・那珂遺跡群－列島における最古の都市－」（『弥生時代の考古学 8　集落から読む弥生社会』）.

熊本県教育委員会　2005：『前田遺跡』熊本県文化財調査報告書第 225 集.

古賀信幸・豆谷和之　1995：「山口県宇部市沖ノ山発見の銭貨資料」（『出土銭貨』第3号）.
小林青樹　2006：「朝日遺跡出土の鯨骨製アワビ起こし」（『動物考古学』23）.
佐藤寛介　2002：「岡山県域における弥生時代鉄器文化の様相」（『環瀬戸内の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻）.
佐賀県教育委員会　1981：『押川遺跡　座主遺跡　前田原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第60集.
志摩町教育委員会　1983：『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集.
志摩町教育委員会　1987：『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集.
志摩町教育委員会　1988：『新町遺跡Ⅱ』志摩町文化財調査報告書第8集.
下條信行　1998：「倭人社会の生活と文化」（『古代を考える　邪馬台国』吉川弘文館）.
下條信行　2002「瀬戸内における石庖丁の型式展開と文化交流」（『犬飼徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』）.
大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会　2000：『妻木晩田遺蹟発掘調査報告』Ⅳ.
武末純一　1983「壱岐・対馬」（『三世紀の考古学』下，学生社）.
武末純一　1988：「佐賀県安永田遺跡の石庖丁－石庖丁の計測値（2）－」（『古文化談叢』第19集）.
武末純一　1989：「山のムラ，海のムラ」（『古代史復元4－弥生農村の誕生－』，講談社）.
武末純一　1991：「弥生時代の楽浪系土器と三韓系土器－瓦質土器を中心に－」（『地方史研究』第41巻5号）.
武末純一　1994：「弥生中期の人々と文字」（『西日本文化』300号）.
武末純一　2003：「九州地方の土器」（『考古資料大観』Ⅰ，小学館）.
武末純一　2006：「韓国の鋳造梯形鉄斧－原三国時代以前を中心に－」（『七隈史学』第7号）.
武末純一　2007：「海を渡る弥生人」（『第8回弥生文化シンポジウム　海と弥生人』鳥取県教育委員会）.
武末純一　2008a：「韓国・勒島遺跡A地区の弥生系土器」（『七隈史学』第9号）.
武末純一　2008b：「韓国・勒島遺跡のアワビおこし」（『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室50周年記念論文集－』）.
朝鮮総督府　1923：『金海貝塚発掘調査報告』大正九年度古蹟調査報告第一冊.
寺井誠　2007：「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的考察」（『古文化談叢』第56集）.
（財）鳥取県教育文化財団　2001：『青谷上寺地遺跡』3，鳥取県教育文化財団調査報告書72.
（財）鳥取県教育文化財団　2002a：『青谷上寺地遺跡』4，鳥取県教育文化財団調査報告書74.
（財）鳥取県教育文化財団　2002b：『古市遺跡群3　古市宮ノ谷山遺跡，古市古墳群』.
鳥取県埋蔵文化財センター　2006：『青谷上寺地遺跡』8，鳥取県埋蔵文化財センター発掘調査報告10.
鳥取県埋蔵文化財センター　2006：『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告2　鉄製遺物の自然科学的研究』.
中尾篤志　2005a：「鯨骨製アワビおこしの拡散とその背景－原の辻遺跡出土資料の紹介を兼ねて－」（『西海考古』第6号）.
中尾篤志　2005b：「弥生時代における結合式釣針の拡散と展開－原の辻遺跡出土資料の位置づけをめぐって－」（『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』）.
長崎県教育委員会　1995：『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集.
長崎県教育委員会　1999：『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集.
長崎県教育委員会　2005：『原の辻遺跡　総集編1』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集.
長崎県教育委員会　2007：『原の辻遺跡－石田大原地区緊急調査報告書－』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集.
日本住宅公団　1973：『鹿部山遺跡』.
日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1996：『津寺遺跡』3，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書調査報告104.
平美典　2001：「韓半島出土弥生系土器から見た日韓交渉」（『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』）.
福岡県教育委員会　1982：『三雲遺蹟』Ⅲ，福岡県文化財調査報告書第63集.
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団　2005：『田和山遺跡群発掘調査報告1　田和山遺跡』松江市文化財調査報告書第99集.
峰町教育委員会　1989：『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集.
峰町教育委員会　2002：『峰町日韓共同遺跡発掘事業　日韓文化講演会「対馬と韓国」～弥生・中世～』.
宮崎貴夫　2008：「よみがえる弥生都市　原の辻遺跡」（『シンポジウムよみがえる弥生都市　邪馬台国時代のまちづくり』福岡県教育委員会）.
村上恭通　1998：『倭人と鉄の考古学』青木書店.

森本幹彦　2008：「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡」（『嶺南考古学会・九州考古学会第 8 回合同考古学会 日韓交流の考古学』）.
山口市教育委員会　2003：『上東遺跡』Ⅱ，山口市埋蔵文化財調査報告書第 83 集.
行橋市教育委員会　1985：『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第 17 集.

〈韓文〉
韓国文化財保護財団　1998a：『慶山林堂遺跡（Ⅰ）－ A~B 地区古墳群－』.
韓国文化財保護財団　1998b：『慶山林堂遺跡（Ⅵ）－ E 地区古墳群－』.
韓神大学校博物館　2005：『風納土城Ⅵ』.
金京七　2007：「南韓出土漢代金属貨幣とその性格」（『湖南考古学報』第 27 輯）.
金賢　2001：「勒島遺跡 A 地区発掘調査概要」（『勒島遺跡を通してみた韓・中・日の古代文化交流』）.
金建洙　1999：『韓国原始・古代の漁撈文化』学研文化社考古学叢書 23.
金承玉・李澤求　2004：「完州上雲里遺跡発掘調査概要」（『第 28 回韓国考古学会全国大会発表要旨　統一新羅時代の考古学』韓国考古学会）.
（財）慶南考古学研究所　2003：『勒島貝塚 A 地区住居跡群』.
（財）慶南考古学研究所　2006a：『勒島貝塚』Ⅱ.
（財）慶南考古学研究所　2006b：『勒島貝塚』Ⅲ.
（財）慶南考古学研究所　2006c：『勒島貝塚』Ⅳ.
（財）慶南考古学研究所　2006d：『勒島貝塚』Ⅴ.
江原文化財研究所　2005：「江陵高等学校化粧室増築工事敷地内文化遺跡試掘調査報告書」（『江陵地域文化遺跡試掘調査報告書』）.
国立慶州博物館　2007：『永川龍田里遺蹟』国立慶州博物館学術調査報告第 19 冊.
国立光州博物館　2003：『光州新昌洞低湿地遺跡Ⅴ』国立光州博物館学術叢書第 40 冊.
国立中央博物館　1992：『固城貝塚』国立博物館古蹟調査報告第 24 冊.
国立中央博物館　2001：『楽浪』
国立済州博物館　2006：『済州終達里遺跡Ⅰ』.
鄭仁盛　2008a：「瓦質土器の「楽浪土器影響説」の検討」（『嶺南考古学会・九州考古学会第 8 回合同考古学大会日・韓交流の考古学』.
鄭仁盛　2008b：「「瓦質土器楽浪影響説」の検討」（『嶺南考古学』47）
池健吉　1990「南海岸地方漢代貨幣」（『昌山金正基博士華甲記念論叢』）.
済州史定立事業推進委員会・済州大学校博物館・済州島民俗自然博物館　2001：『済州金城里遺』.
崔夢龍　1976：「西南区貝塚発掘調査報告」（『馬山城山外洞貝塚発掘調査報告書』文化財管理局.
全南文化財研究院　2006：『羅州郎洞遺跡』.
東亜大学校博物館　2003：『発掘遺蹟と遺物』.
釜山大学校博物館　1989：『勒島住居址』，釜山大学校博物館遺跡調査報告第 13 輯.
釜山直轄市立博物館　1990：『東莱福泉洞莱城遺跡』釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第 5 冊.
釜山博物館　2007：『東三洞貝塚浄化地域発掘調査報告書』釜山博物館学術研究叢書第 19 冊.
木浦大学校博物館 1987：『海南郡谷里貝塚Ⅰ』.
李健茂・李栄勲・尹光鎮・申大坤　1989：「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告Ⅰ」（『考古学誌』第 1 輯（韓国考古美術研究所）.
李健茂　1992「茶戸里出土の筆について」（『考古学誌』第 4 輯，韓国考古美術研究所）.
李清圭・康昌和　1994：「済州道出土漢代貨幣遺物の一例」（『韓国上古史学報』第 17 号）.
李昌熙　2004：「勒島遺跡出土外来系遺物報告－勒島Ⅲ期の設定とともに－」（『勒島貝塚と墳墓群』釜山大学校博物館研究叢書第 29 輯）.
李昌熙　2007：「勒島住居址の一断面」（『第 17 回考古学国際交流研究会　韓国の最新発掘調査報告会』（（財）大阪文化財センター）.
李東注　2004：「泗川勒島 C 地区の調査成果」（『嶺南考古学 20 年の歩み』（嶺南考古学会第 13 回定期学術発表会）.

出典一覧

図1－1･5･6･9･13･17：慶南考古学研究所2006c　7：慶南考古学研究所2003　11･15：慶南考古学研究所2006a　2～4：行橋市教育委員会1985　8：熊本県教育委員会2005　10：山口市教育委員会2003　12：大分市教育委員会2005　14：福岡県教育委員会1982　16：日本住宅公団1973　18：日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会1996

図2－1～4（東三洞貝塚）：釜山博物館2007　5（佐賀貝塚）：峰町教育委員会1989　6（志多留貝塚）･7（菜畑）･15（里田原）･16（夜臼）･17（小川島）･18･19（西川津）･22（原の辻）：中尾篤志2005a　8～14（勒島A地区）：慶南考古学研究所2006c　20･23（青谷上寺地）：鳥取県教育文化財団2002a　21（カラカミ）：小田富士雄・韓炳三編1991　24（郡谷里）：金建洙1999

図3－1･2･8･9：慶南考古学研究所2006a　3･4･10･11：李昌熙2004　5：国立光州博物館2003　6：長崎県教育委員会1995　7：長崎県教育委員会1999

図4－1～4：長崎県教育委員会2007　5：長崎県教育委員会1999

図5－1～9：小田富士雄1982　10：慶南考古学研究所2006c　11：慶南考古学研究所2006a

図6　筆者撮影

図7　武末純一2006

図8－1：慶南考古学研究所2006c　2：李昌熙　2007

図9－1･2：長崎県教育委員会2005　4～8：峰町教育委員会2002　9：唐津市教育委員会1998　10：春日市教育委員会2008　11：佐藤寛介2002　12：下條信行2002　13：鳥取県教育文化財団2002b　14：鳥取県埋蔵文化財センター2006　15：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会2000　16：村上恭通1998

（福岡大学人文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2008年10月31日受理，2008年12月24日審査終了）

Interaction between the Three Han States and Wa：From the Perspective of Settlements Based on Marine Resources

TAKESUE Jun'ichi

Farming settlements in the Yayoi period arose chiefly as a result of making a living from the sea or mountains. The quantity of stone knives provides an indication of whether a settlement was a sea or mountain settlement. The quantity of stone knives found at the Mitokomatsubara Site in Fukuoka Prefecture, a former marine settlement, is roughly one-fifth that found in normal farming settlements. On Tsushima, where it is thought marine activities formed a large part of people's livelihoods, so far only several stone knives have been found.

From the end of Early Yayoi through the first half of Middle Yayoi when states were being formed, groups with a late Mumon pottery culture came to Japan from the Korean Peninsula. While settling on the edges of base settlements, by maintaining networks with their old homelands they initiated trade, developed ports, transferred bronze implement production technology, are thought to have even contributed to state building, and engaged in full-scale maritime trade at a number of settlements based on marine resources.

In the south of the Korean Peninsula as well, there are vestiges of Yayoi people from the same period. Although Yayoi pottery from the Nukdo Site was thought to be mostly from the first half of Middle Yayoi, recently a large quantity of pottery has been excavated which dates from the latter half of Middle Yayoi or from the first half or Late Yayoi at the very latest. If pottery from before the first half of Middle Yayoi is labeled Nukdo Stage I and that from the latter half of Middle Yayoi Nukdo Stage II, the extent of interaction with Japan was greater in Nukdo Stage II than in Nukdo Stage I. Pottery from this stage includes fishing implements from northern Kyushu (abalone scrapers, coupled fish hooks), which points to the migration of sea-going people from Wa. Similar fishing implements found in San'in have been linked to sea-going people.

Pottery and coins made in China became conspicuous in marine settlements in western Japan and southern Korea after the latter half of Middle Yayoi (latter half of Yayoi). It is believed that they were part of the trade network that spanned from Kinki to the Nangnang commandery. In contrast to Chinese mirrors, many Chinese coins have been excavated from areas in marine settlements where people went about their daily lives, although scarcely any have been found in the huge farming settlements in the center of the country or in the urban settlements that they evolved into. The

same applies to the south of the Korean Peninsula, although five have been found from areas at the Nukdo Site where people went about their daily lives, none have been found from such areas in base settlements. What is more, large quantities of coins made in ancient China have been discovered in the coastal regions of both the Three Han states and Wa. Accordingly, it is believed that the marine settlements of western Japan and the southern Korean Peninsula created a world that was distinct from that of farming settlements, and used Chinese coins as payment when engaging in trade, which was their main form of livelihood. They most likely traded in raw iron and iron materials. It is also possible that the trade of the marine settlements involved not only the transfer of southern goods to the north and northern goods to the south, but that processing took place part way that added further value.

Keywords: The settlement based on marine resorces in ancient Japanese archepelago and Korea Peninsula. The second half of the Yayoi Period, Pre three Kingdoms, the newcomer from Korean Peninsula, Nangnang pottery, the coin made in ancient China